

徳島大学教養部紀要

(人文・社会科学)

第十八巻 別刷

1983

ハルトマン・フォン・アウエの「衰れなハインリヒ」

石川 栄 作

ハルトマン・フォン・アウエの「衰れなハインリヒ」

石川 栄 作

Der arme Heinrich Hartmanns von Aue

Eisaku ISHIKAWA

Zusammenfassung

Der arme Heinrich unterscheidet sich von den anderen Werken Hartmanns in dem Punkt, daß die Handlung im Innern der Personen verläuft. Das Interesse des Dichters konzentriert sich auf das Seelische. Die innere Vertiefung möchten wir hier beobachten, um die Bedeutung dieses Werks in Hartmanns ganzen Werken aufzuhellen.

Die Hauptperson Heinrich tritt zuerst als ein idealer Ritter auf, dessen Tugenden am Anfang weitläufig aufgezählt werden. Die eigentliche Absicht, in der seine positiven Eigenschaften zunächst dargestellt werden, ist aber nicht zu zeigen, was er besitzt, sondern vorzuführen, woran es ihm fehlt. Denn ihn überfällt der Aussatz, den man für *die swære gotes zuht* (120) halten soll. Die Krankheit enthüllt sein wahres Wesen: das Wichtigste, was ihm abgeht, ist nichts anders als die Gnade Gottes.

Der Aussatz, die göttliche Strafe für *superbia*, hat aber auch den Charakter einer Mahnung und Läuterung: er ist die Gelegenheit zur Erlösung, zum echten Glück in dieser und jener Welt. Die Abgeschiedenheit im Meierhof, zu der die Krankheit ihn zwingt, bedeutet also gleichzeitig sein innerliches Leben zur Verbesserung.

Das unmittelbare Moment seiner Wandlung ist die Meierstochter, deren *gemüete* man *der engel güete* (466) gleichstellen kann. Aus Anlaß von ihrer *triuwe* beginnt er den Weg zur Läuterung zu bahnen. Er erliegt zwar zunächst der Versuchung Gottes, indem er den opferwilligen Entschluß der *gemahel* annimmt. Er gewinnt aber zuletzt *einen niuwen muot* (1249), als er die innere Schönheit des Mädchens in Salerno ansieht: ihr Bild, *nacket und gebunden* (1246), verschmilzt dem betrachtenden Heinrich in eins mit dem des nackten und gebundenen Christus. Heinrich gibt die Haltung der *superbia* auf. Er ist nun zur völligen Hingabe an Gott bereit: er ist geläutert. Als er von Gottes Gnade geheilt wird, manifestiert er seinen *niuwen muot* (1249) durch seine Ehe mit der Meierstochter.

Gerade in dieser Heirat besteht Hartmanns Ideal. Die Ehe zwischen Heinrich und Meierstochter ist Hartmanns idealistisch-harmonische Welt, wo das Ritterliche und das Christliche in eins verschmelzen. Diese harmonische Welt aufzubauen, ist Hartmanns wesentliche Aufgabe. In diesem Sinn hat *der arme Heinrich* eine gleiche Idee mit Hartmanns anderen Werken gemein. Die unterschiedliche Eigenschaft besteht nur darin, daß *der arme Heinrich* die ideale Welt durch das innerliche Nachdenken verwirklicht. Hier können wir ein inneres Bestreben des Dichters Hartmann anerkennen, der in seinen ganzen Werken ein ritterliches Ideal verfolgt. *Der arme Heinrich* ist ein innerlicher Prozeß zur Hartmanns ritterlichen idealistisch-harmonischen Welt, die vom Dichter in seinem letzten Werk *Iwein* vollends aufgebaut wird.

序

ハルトマン・フォン・アウエの全叙事詩の中で「哀れなハインリヒ」は、他の三篇とは若干趣を異にした作品である。この物語の主人公に高貴な騎士が選ばれているという点では成程アルトゥース・ロマーンの「エーレク」及び「イーヴァイン」と共通するものもあると言えるが、しかしそれら騎士文学に特有の冒険、試合並びに饗宴等といったものはこの「哀れなハインリヒ」の中には全く現われない。宗教叙事詩と言われる「グレゴorius」においてさえ宮廷的・騎士的なものは容易に見い出されるのであるが、この最も短い作品においては勇敢な騎士の活動は言うまでもなく、雅やかな宮廷的雰囲気醸し出す要素は全く何もないのである。否、それどころか、この物語の背景にある四つの場所も全く外面的に描写されていないと言わなければならない。まず最初の場面と最終場面で想定される主人公ハインリヒの居城は、唯の一行の記述も見られず、最初の場面では主人公の世俗的な名誉が表面的に語られているに過ぎないし、最終場面でも浄化された主人公が当然辿り着くべき結婚までの経過が述べられているに過ぎない。分量的にも内容的にも大きな部分を占める小作人の農場についてもそれが開墾地にあるというだけでその他の外面的な描写は一切見られない。主人公が病気の治療を求めてまず出かけて行ったモンペリエもわずか10行足らずで片付けられているし、またのちに最も重要な決定的な場面となるサレルノの医師の手術室についても、あとで聴覚的な重要な役割を果たす医師の小道具の描写を除けば、外面的なものの記述は全く見当たらないのである。これは要するに、W. フェヒターが指摘しているように、作者ハルトマンの関心が精神的なものに集中しているからである¹⁾と言えよう。作者ハルトマンの眼は外面的なものではなく、内面的なものへと向けられているのである。物語の舞台は確かにシュヴァーベンの国から一度モンペリエそして二度サレルノへとかなり広い地域にまで広がっているものの、物語そのものはあたかも一つの島においてであるかのように進行するのであり²⁾、あらすじは登場人物たちの内面の中で展開されているのである。³⁾この作品の大部分を占めている登場人物たちの対話は、その内面的な深化が詩人にとっていかに重要であったかを裏付けるもの⁴⁾とも言えよう。本稿では、あらすじの展開に重要な意味を持つ語・語句を手掛かりにしてその内面的な深化を辿りながら、この作品がハルトマンの全叙事詩の中で持つ意義を問うことにしたい。

1. 騎士 (der herre) ハインリヒ——êre と leit——

まず主人公ハインリヒは、シュヴァーベンの国で十分な榮譽に輝く一人の領主であり(30-5)、門地高く富裕で(38-9)、かつまた才徳も優れた(40)一人の高貴な騎士(ein herre, 30; ein ritte

1) Werner FECHTER: Über den „Armen Heinrich“ Hartmanns von Aue. *Euphorion* 49, 1955. S. 21. なお、本稿はこの W. フェヒターの論文に負うところが多い。

2) Ebd., S. 21.

3) Ebd., S. 22.

4) Ebd., S. 20.

34) として登場する。彼にはこの世の名誉として (*zu werltlichen êren*, 57) 望みうる最高のものが与えられており、彼こそは現世の歓び (*der werlte fröude*, 61) の理想であった。彼は窮する人々の避難所でもあり (64)、助言の橋でもあり (70)、さらにミンネについても上手に歌い (71)、世の人々の称賛 (*der werlte lop unde prîs*, 73) の的でもあった。騎士ハインリヒは諸々の徳を身につけた理想の人物として詩人ハルトマンによって長い言葉 (30-74) の中で称えられて登場するのである。

しかし、作品の始めの部分でまずこうして主人公の理想的な姿が語られている本来の意図は、主人公が身に備えている美德の全てを示すことではなく、むしろ逆に彼に欠けている最も重要なものを曝け出すことにあったのではあるまいか。名誉と富 (*êren unde guotes*, 77) に恵まれてこの世の歓び (*werltlicher wünne*, 79) を享受していた騎士ハインリヒ (*der herre Heinrich*, 75) は、突如癲病 (*miselsuht*, 119) に襲われてしまうからである。この癲病を単なる肉体的苦痛を伴う病気として簡単に片付けてはならないことは言うまでもないことである。当時西洋に広まっていたというこの癲病は、これまでの殆どの研究で一般に肯定されてきたように、神罰として神に見放された象徴的表現と見るのが妥当であろう。⁵⁾ 癲病が主人公の真実の姿を剥き出しにしたのであり、騎士ハインリヒに欠けていた最も重要なものとは神の恩寵以外の何ものでもなかったのである。ハインリヒのそれまでの名誉 (*êre*) が全て「世俗的」(*werltlich*, 上述イタリック体参照) なものであったと作者によって語られているところからもすでにそれが暗示されているし、また事実、作者ハルトマンはすぐあとでそれを明確に語っているのである。

an hern Heinrich wart wol schîn:
der in dem hoechsten werde
lebet uf dirre erde,
derst der versmâhte vor gote.
er viel von sînem gebote
ab sîner besten werdekeit
in ein smæhelfchez leit:
in ergreif diu miselsuht.
dô man die swæren gotes zuht
gesach an sînem lîbe,
manne unde wîbe
wart er dô widerzæme. (112-23)

騎士ハインリヒにおいて明らかとなったのは、
この世で最高の幸福を
味わっている者も神の前では
卑しい者となるということである。
彼は神意によって
最高の幸福から
恥多き苦境へと落とされたのである。
癲病が彼を襲ったのである。
彼の身に神の重い刑罪が
下されたのを見たとき、
男や女にとって
彼は不快な存在となったのである。

この世でいかに堅固で強力で最上のものでも、神の恵みなくしては、完全というわけにはゆかない (97-100) ことが明らかである。現世の歓び (*werltlicher sîeze*, 87) の儂い王冠がいとも

5) Vgl. z.B. Arno SCHIROKAUER: Zur Interpretation des Armen Heinrich. *Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur* 83, 1951/52. S. 68. なお、本稿は W. フェヒターの論文とともにこの A. シロカウアーの論文に負うところが多い。

簡単に最高の幸福から足下に落ちてしまうことを示しているこの作者ハルトマンの言葉の中で、die swæren gotes zuht (120) の zuht は神の「罰」(Strafe, Züchtigung) の意味でなければ一体何であろう。⁶⁾ かつて世の人々に気に入られていた (124-5) 彼は、今や神罰としての癩病で人々には不快な存在となった (126-7) のである。騎士 (der herre) ハイน์リヒは哀れな (der arme, 133) ハイน์リヒとなったのである。それは丁度富貴なヨブが、その安穩な生活の只中で、惨めにも腐った藁わらの上に身を横たえなければならなくなったのにも似ていた (128-32)。しかし、自らの身の上に災いがふりかかってくる時、魂の平安を保つために辛抱強くこの忌わしい病気と、世間から受ける恥辱とを耐え忍び、喜んで神を称えた善良な (der guote, 139) ヨブ (139-45) のようには、この哀れな (der arme, 146) ハイน์リヒは忍耐の心を持ち続けることはできなかった。ここでヨブは「善良な」(der guote, 139) と形容され、ハイน์リヒは「哀れな」(der arme, 146) と語られているのも当を得たことである。⁷⁾ 自分の病気が神罰だとは気づいていないハイน์リヒは、ただ幾多の榮譽 (êre) を捨て去らねばならぬことばかり深く悲しんでいた (157-9) からである。

哀れなハイน์リヒが神罰にも気づかず神に対して不正な態度を取っているということは、さらにその後も彼が病気の治癒のみを求めようとするところからも明らかである。すなわち、この病気のある種のもものは治療が可能である (165-8) ことを耳にしたハイน์リヒは、治療を求めてまずモンペリエ (175) へ、そして次にはサレルノ (180) へと出かけて行ったのである。しかし、サレルノの名医の診断は当然のことながらハイน์リヒを決して喜ばせるものではなかった。

》 iuwer sūhte ist also : (was frumet daz ichz iu kunt tuo?) dā hœret arzenie zuo, des wæret ir genislīch. nu enist aber niemen sō rich noch von sō starken sinnen, der sī mtūge gewinnen. des sit ir iemer ungenesen, got welle denne der arzāt wesen. ... ir müeset haben eine maget, diu vollen hibære und ouch des willen wære, daz si den tōt durch iuch lite. nu enist ez niht der liute site, ...	「あなたの病気は、 (こんなこと言っても何にもならないが) それを治すには 一通りならぬ薬が必要なのです。 が、その薬は裕福な人でも 賢い人でもなかなか 得られないものなのです。 それゆえ神が医者になられぬ限り、 あなたの病気は治らないのです。 ... つまり、あなたは 完全に結婚できて、 しかもあなたのために命を棄てようという 少女を手に入れなければならないのです。 だが、そんな心がけの人間は
--	---

(196-204)

6) Timothy BUCK: *Zuht, räche* — und *versuochunge*: Nochmals zum Begriff „Strafe“ im *Armen Heinrich*. *Euphorion* 62, 1968. S. 312.

7) 聖書ではまず神のために用いられるこの *guot* という形容詞は、中世ではしばしば天使、聖者並びに道徳的に優れた人物に対して用いられていたのである。(Vgl. W. FECHTER: a.a.O., S. 14. und auch Arno SCHIROKAUER: Die Legende vom armen Heinrich. *Germanisch-Romanische Monatsschrift* 33, 1951/52. S. 267.)

daz ez ieman gerne tuo.	なかなかあるわけのものではない。
sô hœret ouch anders niht dar zuo	その少女の心臓の血だけが
niwan der megede herzebluot :	必要なのであって、
daz wære für iuwer suht guot. <	それがあなたの病気には効くのです。」

(224-32)

そのような少女を手に入れるのは不可能だと悟った(233-6)その時点で、ハインリヒはひとまず自分の病気の治療については一切の希望を絶った(239-41)ものの、神に服従する意志がないことはまだなお3年後にも明らかである。「神が医者でない限り」(204)というサレルノの名医の言葉を無造作に聞き流したハインリヒは、ここで真の意味での哀れな(der arme)ハインリヒになってしまったと言わなければならないであろう。哀れなハインリヒは、サレルノから故郷へ帰ると、財産もろとも世を捨てて、開墾地の小作人農場でひっそりと暮らす隠遁生活を余儀なくされることとなったのである。

このように彼を襲った癩病は、神の重い刑罰として彼を騎士社会から排斥すること、すなわち彼から騎士的生命を奪い取ることを意味していた⁸⁾のであるが、しかし作者ハルトマンの最終的な意図からすれば、癩病は主人公を恥多い苦境(leit, 118)に陥れるためだけのものではないことをここで付け加えて言っておかなければならない。作者ハルトマンにとって大切なのは、主人公をêreからleitへ陥れることではなく、反対にそのleitから新たなより高きêreへと純化させることにあるのであり、癩病は同時に浄化への戒めという意味をも含んでいたのである。ここにハルトマンの理想主義が窺えるのであり、神罰として余儀なくされた開墾地での隠遁生活も、騎士社会からの排斥と同時にその苦境から浄化への過程に足を踏み入れる契機としての内面的生活を意味していたと言えるのである。

2. 哀れな(der arme)ハインリヒと小作人の娘——gemahelとgotes zuht——

哀れなハインリヒはこうして開墾地の小作人農場へと隠れ住むことになったのであるが、彼にとってその浄化への過程に入るための最初の契機となったのは、小作人家族の献身的な奉仕である。その農夫は誠実な心の持ち主で(290)、病気の主君の世話を喜んで引き受けた(291-4)のである。主君ハインリヒからこれまで目をかけてもらっていたこの農夫は、ここで手厚く恩返しをした(285-7)のであり、明らかにこの農夫は哀れなハインリヒとはコントラストを成す人物である。⁹⁾ この世の全てのものは神に由来することを心得ていたと言えるこの農夫は、「神の恵みによって彼の身分としては申し分のない暮らしをしていた」(295-6)と作者ハルトマンによっても明確に語られている。まめやかに働く妻(298)のほかにも数人の子供(299)にも恵まれていたこの農夫は、W. フェヒターの指摘の如く、人間としてそしてキリスト教徒としていかに振る舞うべきかその模範を主君に家族の者ととも自らの生活で示していると言っても差し支えないであろう。¹⁰⁾

しかし、その小作人家族の中で最もその模範性が強く、また主君ハインリヒと最も明確にコントラストを成す存在として描かれているのは、例えばA. シロカウアーに続いてW. フェヒ

8) Vgl. Friedrich MAURER: Leid. Studien zur Bedeutungs- und Problemgeschichte, besonders in den großen Epen der staufischen Zeit. Francke Verlag 1951. S. 39.

9) Vgl. W. FECHTER: a.a.O., S. 8.

10) Ebd.

ターも指摘しているように、その農夫の8歳になる一人の娘である。¹¹⁾ 否、それどころか、この少女はハインリヒとともにこの作品の主人公とも言える存在であり、¹²⁾ H.B. ウィルソンの指摘の如く、彼女がいなければハインリヒなる人物は不完全な存在である¹³⁾ と言ってもよいであろう。そのハインリヒは、すでに述べたように、まづ生まれも貴く誉れも高い一人の領主として登場するが、一方少女は世間から遠く離れた開墾地で質素に暮らしている農夫の娘として、しかも家族の他の者たちと同じように名前もない人物として登場する。¹⁴⁾ 最初は名声高き理想の騎士だったハインリヒが、突然癩病に襲われ人々も近づくのが不快になるほどの存在になるのに対して、少女は最初から最後まで極めて慈悲深い (*sô rehte gütlichen*, 305) 少女として主君のために奉仕することを怠らない。

Die andern hâten den sin,
daz sî ze rehter mâze in
wol gemiden kunden:
dô flôch si z'allen stunden
zuo ime und niender anderswar.
si was sin kurzweile gar.
sî hete gar ir gemüete
mit reiner kindes güete
an ir herren gewant,
daz man sî z'allen zîten vant
under ir herren fuoze. (315-25)

他の人たちは、
体よく騎士のそばに寄るのを
避けることを考えているのに、
この娘だけはいつも主君のところへ行き、
他へは決して行かず、
彼女は主君の徒然の慰めであった。
彼女は純真な子供の素直さをもって
自分の心を
その主君に傾け、
彼女の姿はいつでも
主君の足もとにおいて見られた。

「主君の足もとに」(325)という表現の中にも読み取られうる少女の純粋な慈悲深さは、国王の姫としてもふさわしいほどの美しさ (*wætliche*, 314) となって外面的にも現われていると言えよう。他の人たちには不快な病人に対しても常に慈悲深く奉仕 (*mit ir gütlichen pflege*, 310) することを怠らないこの少女は、H.B. ウィルソンも指摘しているように、隣人愛の化身である。¹⁵⁾ 神の贈物である隣人愛——カリタス (*caritas*) ——が、常に主君に奉仕するよう少女を動機づけているのである。¹⁶⁾

diu guote maget in liez
beliben selten eine:

善良な少女は彼を
決して一人にはしなかった。

- 11) Vgl. A. SCHIROKAUER: Zur Interpretation des Armen Heinrich. S. 74f. und auch W. FECHTER: a.a.O., S. 8ff.
12) この少女がこの作品の中で欠かせない人物であることは、作品全体 (1544詩行) のほぼ半分 (718詩行) を占める直接話法のうち、ハインリヒには184詩行しか用いられていないのにその少女には362詩行が割り当てられていることから頷けることである。(Vgl. W. FECHTER: a.a.O., S. 8.) 因みに、直接話法の残りには小作人夫婦に99詩行、サレルノの名医に70詩行、ハインリヒの親族・家臣に3詩行が割り当てられている。
13) Harold Bernard WILLSON: Symbol and Reality in 'Der arme Heinrich.' *The Modern Language Review* 53, 1958. S. 527.
14) W. FECHTER: a.a.O., S. 9.
15) H.B. WILLSON: a.a.O., S. 528.
16) Ebd., S. 528. und S. 529.

er dâhte si vil reine.
swie starke ir daz geriete
diu kindische miete,
iedoch geliebete irz aller meist
von gotes gebe ein sîezer geist.

少女は主君を汚れたものだとは思わなかった。
それには、子供にふさわしい贈物を貰ったことが
大きな原因となっているとはいえ、
何よりも神から吹き込まれた
純美な魂のなすわざであった。

(342-8)

小作人の娘が神と結びつき、神への完全な帰依の中で生きている¹⁷⁾ということは、ここで詩人によってはっきりと語られているし、また「善良な少女」(diu guote maget, 342)の形容詞 *guot* が聖なる名前の前に置かれる語である¹⁸⁾ことを考えてみてもそれはおのずと明らかである。少女のこのような純美な魂に触れたハインリヒは今や少女のことを「花嫁」(*gemahel*, 341)と呼ぶのであるが、これはすなわち、上記の H.B. ウィルソンの指摘の如く、少女の態度がカリタス (*caritas*) によって動機づけられている¹⁹⁾ことを示すものと言えよう。つまり、神によって吹き込まれた少女の純美な魂の中にはすでに完全な自己犠牲への意志が用意されているのであり、²⁰⁾ その純美な魂は、やがて少女が主君の痛ましい病気の治癒に関することを聞き知るや、さらに高まるのである。

このような「花嫁」(*gemahel*) と呼びかけずにはいられない少女と一緒に3年間暮らすうち哀れなハインリヒは、自分の病気の原因について悟り始めるのである。つまり、この「花嫁」(*gemahel*) という呼びかけの言葉の中において、今やハインリヒと少女との間には精神的な強い結びつきが生まれてきていることが明らかと言えよう。「花嫁」(*gemahel*) の純粋無垢な心に触れて初めて、ハインリヒは自分の病気が「神の重い刑罰」(*die swæren gotes zuht*, 120)であることを悟ったのである。同情的な小作人夫婦に自分の病気のことを尋ねられたハインリヒは、心の底から深い溜息 (*einen tiefen sîft von herzen*, 379; *der sîft*, 382) をついて悲しみながら (*mit solher riuwe*, 381) これまでの自分を顧みる。ここで詩人によって初めて、*riuwe* (381) が使われているのも偶然ではない。ハインリヒは以前のようにただ嘆くのではなく、後悔の念を持って悲しみながら次のように告白するのである。

》 Ich hân disen schemelichen spot
vil wol gedienet *umbe got*.
wan dû sæhe wol hie vor,
daz hôch offen stuont mîn tor
nâch werltlicher wûnne. (383-7)

「私がこのように生き恥を晒すというのも
天罰として致し方のないことなのだ。
お前もこれまで見てきたように、
私の門はとかくこの世の歓びに対して
広く開かれていた。

...
dô nam ich des vil kleine war,
der mir daz selbe wunschleben
von sînen gnâden hete gegeben.
daz herze mir dô alsô stuont,

...
しかし私は、望み通りの生活を
お慈悲でさせて下さった神のことをば、
いっこう心に認めていなかった。
私の心柄は、

17) W. FECHTER: a.a.O., S. 9.

18) 註7を参照のこと。

19) H.B. WILLSON: a.a.O., S. 529.

20) Ebd.

als alle werlttôren tuont,	名誉も財産も
den daz rætet ir muot,	神の助けなしに手に入るものと
daz si êre unde guot	思い込んでいる世の馬鹿者どもと
âne got mügen hân.	同じことであった。
sus trouc ouch mich mîn tumber wân,	私も愚かな妄想にあざむかれて、
wan ich in lützel ane sach,	神の恵みで名誉と富とが
von des genâden mir geschach	与えられたのだということに
vil êren unde guotes.	いっこう気がつかなかった。
dô des hôchmuotes	幸運の門口を守る尊い門番は、
den hôhen portener verdrôz,	私のこういう慢心が頼にさわったので、
die sælden porte er mir beslôz.	私に対してその門を閉ざしてしまったのだ。
dâ kume ich leider niemer in:	私がもうその中へ入れなくなったというのも、
daz verworhte mir mîn tumber sin.	全く私の愚かな心柄のためと申すほかはない。
got hât durch räche an mich geleit	神は罰として、
ein sus gewante siecheit,	誰にも治せない
die niemen mac erlöesen. 《 (392-411) 》	こんな病気を私にお与えになったのだ。」

こうして今やハインリヒは、自分の病気がこれまでの高慢 (superbia) の罪に対する神の罰 (räche, 409) であることを悟るのであるが、しかしこの段階でのハインリヒの告白はまだなお真の意味での懺悔にはなっていないと言わなければならない。長々と続く彼の告白 (383-458) の中には、神に服従する意志が未だ見い出されないばかりか、最後には病気の治癒手段のことまでが語られているからである。

一方、このハインリヒの告白を聞いた少女の「無邪気な心」(ir kintlich gemüete, 465) は、ハインリヒとは異なって、「天使の善良さ」(der engel güete, 466) にも喩えられてさらに円熟味を増す。「純真な子供の素直さ」(reiner Kindes güete, 322) 或いは「善良な少女」(diu guote maget, 342) と詩人によってこれまで表現されてきた少女の気質は、今や「天使の善良さ」という超現世的なものにまで高められているのである。²¹⁾ この段階に至って初めて用いられている「清らかな少女」(diu reine maget, 460) という表現もまさにマリアの表現と同じものとして考えてよいであろう。²²⁾ さらに少女が神と結びついているという理由で、少女は——マリアのように——優しい女性として diu süeze (480; 554) 或いは diu vil süeze (461) とさえ呼ばれているのである。²³⁾ そして罪を告白する前のハインリヒの身振りとして用いられていた「心の底からの深い溜息」(einen tiefen süft von herzen, 379) と「悲しみ」(riuwe, 381) は、今や少女の身振り (manegen süft tiefen . . . von herzen, 474-5; riuwe, 477) なのである。²⁴⁾ 両者の違いは、ハインリヒは自分自身のことを悲しんでいるのに対して、少女の方は他人のために悲しんでいるという点にある。²⁵⁾ 作者ハルトマンはプロローグにおいて「他人の罪のために祈る者はそれでもって自分自身をも救うことになる」(27-8) と格言風に語っているが、このことがこ

21) A. SCHIROKAUER: Zur Interpretation des Armen Heinrich. S. 75.

22) Ebd., S. 73.

23) W. FECHTER: a.a.O., S. 19.

24) Vgl. A. SCHIROKAUER: Zur Interpretation des Armen Heinrich. S. 75.

25) W. FECHTER: a.a.O., S. 10.

の場合の少女にも当て嵌まると言えるのではあるまいか。今や少女はハインリヒの罪ゆえの悲しみ (riuwe, 381) を彼に代わって嘆き (riuwe, 477) つつ、こうして一晩中のみならず翌日もずっと塞ぎ込んでいた (510-1) ののである。というのも、彼女の胸深くには、かつて子供としてそんな例がなかったほど、限りない同情心 (die aller meiste güete, 522) が潜んでいたからである。そしてその二日目の夜、天使にも喩えられた少女は一つのことを固く決心した (525)。つまり、自分が明日も生きていたなら、是非とも主君のために自分の一命を捧げよう (526-8) という決心をしたのである。

3. 11歳の少女の決意—— *hibære* と *hân den muot* ——

天使にも喩えられた少女は、こうして主君の告白を聞いてから二日目の夜、自分の命を主君に捧げることを決心したのであるが、それが夜中に決心されたということも決して意味のないことではない。のちにこの作品の最後の方の言葉 (1384-94) から明らかとなるように、ここで少女も神によって試されていたのである。そして今やその試しを見事に克服したと言えるのである。なぜなら、他人は皆眠り、誰も彼女に忠告できない夜中に、少女はこうして自らの意志で決心したからである。そして、目を覚ました両親に向かって少女はその決意を次のように打ち明けるのである。

》 als uns min herre hât gesaget,
sô mac man in vil wol ernern.
ich bin, irn welt mirz danne wern,
zuo siner arzenie guot.
ich bin ein maget und hân den muot,
ê ich in sihe verderben,
ich wil ê für in sterben. < (558-64)

「殿様が私たちに話したところでは、
その病氣は治せると言います。
もしあなた方が邪魔さえしなければ、
この私とその薬になってあげるわ。
私は乙女だしそのつもりにもなっているんです。
殿様がむざむざ亡くなるのを見るよりは、
私が身代わりに死んだ方がましなのです。」

自分の決意を初めて明らかにしたこの言葉の中でも特に「私は乙女でそのつもりもある」(ich bin ein maget und hân den muot, 562) という表現の中には、少女とは思えないほどに強い決意が窺える。以下若干この中に用いられた語ないし語句をめぐって、この少女の決意の堅固さについて考えてみよう。

まずこの少女の決意の背景には、あのサレルノの医師が口にした殆ど不可能にも近い治癒手段 (224-32) があるのは勿論のことである。つまり、ハインリヒはそれを前日の告白の中で小作人家族に向かって初めて次のように打ち明けたのである。

》 mir wart niht anders dâ gesaget,
wan daz ich müese hân ein maget,
diu vollen *hibære*
und ouch des willen wære,
daz si den tût durch mich lite
und man si zuo dem herzen snite;
und mir wære niht anders guot
wan von ir herzen daz bluot. < (445-52)

「私はこう言われたのです。
完全に結婚できる乙女で、
しかも私のために
死ぬ気になっている乙女を
手に入れ、その娘の心臓を
えぐりとらなければならない。
その心臓の血だけが
私の病氣に効能があるのだ、と。」

ここにおける「完全に結婚できる」(vollen hibære, 447) 乙女とは一体どのように解されるべきであろうか。さまざまな問題を含んでいる箇所であるが、少なくともこの hibære (結婚できる) とは、結婚適齢期の完全な生理的成熟のことではなく、むしろ精神的な成熟のことを意味しているということは、例えば A. シロカウアーなども指摘している通りである。²⁶⁾ それは次の詩行に「しかもその気になっている」(und ouch des willen wære) という「意志」が続いていることから明らかである。この「しかも」(und ouch) という接続詞は別の新しい条件を導き出すためのものではなく、²⁷⁾ hibære と密接に結びついているものと考えてよいからである。さらに少女の 11 歳という年齢についても考察してみれば、その hibære の精神的な意味が明らかである。すなわち、A. シロカウアーの考察によれば、「哀れなハインリヒ」における少女は 8 歳で登場するが、これは子供 (infans) の域を脱し、第二の人生の段階へ足を踏み入れることを意味し、その 3 年の経過のうちに、つまり 11 歳のときに初めて善と悪とがはっきりと区別できる能力を身につけるのである。²⁸⁾ このことは、A. シロカウアーが実際に示しているように、「グレゴリウス」からも確認されるのである。²⁹⁾ 従って、上述の「私は乙女でそのつもりもある」(ich bin ein maget und hân den muot, 562) における場合の maget は、kint (子供) ではなく、善悪が判断できて十分「決心しうる」ほど精神的に成熟した女性という意味が含まれていると言えよう。そして「そのつもりもある」(hân den muot) という表現は自分にはさらにその強い意志があるということなのである。娘がまだ子供 (ein kint, 573) だと考えている父親は、死の恐ろしさ (573-88) を話して娘の決心を変えさせようとするが、しかし少女はその脅しにも屈することなく真に「決心することができ」(entschlußfähig)、かつ「決心している」(entschlossen) という強い意志を示すのである。両親の前で長々と話す少女の言葉 (673-867) の中にはその精神的な成熟と意志の堅固さが読み取れるのである。

》 Vater min, swie tump ich sî,
mir wonet iedoch diu witze bî,
daz ich von sage wol die nôt
erkenne, daz des lîbes tôt
ist starc unde strenghe. (593-7)
...
ez ist mir komen ûf daz zil,
des ich got iemer loben wil,
daz ich den jungen lîp mac geben
umb daz ewige leben. 《 (607-10)

「お父さん、私がいくら若いからといっても、
人間が死ぬときの苦しみが
どんなにひどく恐ろしいものだから
というくらいは、
人の話で聞いて知っているのよ。
...
私は、永遠の命を得るために
若い身体を捧げるという
はっきりした目的がたっているんだもの、これは
神様のおかげだとありがたく思っているのよ。」

自分の犠牲をさらに家族全員の幸福と結びつけて、この成熟した少女は自分の犠牲の正当化を試みる術をも心得ているのである。³⁰⁾

》 ir hât êre unde guot:

「あなた方には名誉と財産がある。」

26) Vgl. A. SCHIROKAUER: Die Legende vom armen Heinrich. S. 265.

27) Vgl. A. SCHIROKAUER: Zur Interpretation des Armen Heinrich. S. 65.

28) Vgl. ebd., S. 62ff.

29) Vgl. ebd., S. 64.

30) Vgl. W. FECHTER: a.a.O., S. 10f.

daz meinet mines herren muot,
wan er iu leit nie gesprach
und ouch daz guot nie abe gebrach.
die wile daz er leben sol,
sô stêt iuwer sache wol.
und lâze wir den sterben
sô müezen wir verderben.
den wil ich uns fristen
mit alsô schoenen listen,
dâ mite wir alle sin genesen. 《 (617-27)

これはみな殿様の思し召しによるのです。
殿様はあなた方に悪いことはおっしゃらないし、
財産も取りあげたりなさらないから。
あの方が生きていられる限りは、
あなた方も安泰です。
あの方を死なせたら、
私たちも破滅するんです。
私は、みんなが無事でいられるように、
立派なやり方で
あの方の命をお助けしようとしているんです。」

娘が本気なのを見てとった (630) 母親が今度は、「人は父母に愛情と敬意を捧げなければなら
ない」(642-3) という神の戒律 (640) を持ち出して、娘の意志を変えさせようとするが、父に
続くこの母の脅しにも少女は屈せず、それどころか死をキリストとの結婚だと考えて母親を慰
めつつ、母が持ち出した神の戒律に関連づけて triuwe (誠実) というものの意味を解き明かす
のである。

》 ir minnet mich, deist billich.
nû sihe ich gerne, daz mich
iuwer minne iht unminne.
ob ir iuch rehter sinne
an mir verstân kunnet,
und ob ir mir gunnet
beide guotes unde êren,
sô lâzet mich kêren
ze unserm herren Jesu Krist,
des gnâde alsô stæte ist,
daz si niemêr zergât,
und ouch zuo mir armen hât
alsô grôze minne
als z'einer küniginne.
Ich sol von minen schulden
Oz iuweren hulden
niemer komen, wil ez got.
ez ist gewisse sin gebot,
daz ich iu si undertân,
wan ich den lîp von iu hân.
daz leiste ich âne riuwe.
ouch sol ich mine triuwe
an mir selber niht brechen.
ich hôrte ie daz sprechen:

「あなた方が私を愛されるのはいいけれど、
それが私にとってかえって
仇となることのないようにして頂きたいの。
もし私の気持が
よくわかり、
私に財産と名誉を
授けて下さるつもりなら、
私を主イエス・キリストの
ところへやってちょうだい。
主のお恵みは決して
尽きるということがなく、
私のような
貧しい娘をも
女王様と同じように愛して下さるのよ。
私は自分から好きこのんで、
あなた方のご恩に背くようなことはしないわ。
それで神様の思し召しにさえかなうなら。
命を授けて頂いた
あなた方の言いつけ通りに従うのが、
神様のご命令でもあるんだから、
私は喜んでそうしたいんです。
けれども私は、自分自身に対しても
忠実でなくちゃならないのよ。
私はいつもこういうことを聞いているわ。

swer den andern fröuwet sô,
daz er selbe wirt unfrô,
und swer den andern krœnet
und sich selben hœnet,
der triuwen si joch ze vil.
wie gerne ich iu des volgen wil,
daz ich iu triuwe leiste,
mir selber doch die meiste.

人を喜ばせるために
自分が悲しんだり、
人に王冠をいただかせるため
自分の名誉を踏みつけにしたりするのは、
忠実ということの行き過ぎだって。
私はできるだけ
あなた方に忠実になりたい。
でも自分に一番忠実になりたいんです。」

(809-40)

一見両親のことを顧みない利己的な triuwe に見えるが、しかし自己への triuwe は実は神への triuwe なのであり、そして何より自分に一番忠実になりたいという言葉は少女自身犠牲を本当に望んでいることを最もよく示しているものと言えるのではあるまいか。犠牲への堅固な意志を示しながら、最後に少女は自分の死の意味するところを明らかにするのである。

》 da sol uns viere mîn tôt
leesen von aller slahte nôt.
des tôdes des genese wir,
und ich doch verre baz dan ir. 《

「私の死によって私たち4人とも
地獄や悪魔から救われる。
私たちは破滅から救われる。それも私が
あなた方よりもずっとよく救われるんです。」

(863-6)

このように長々と語る少女の言葉の中には、成程厭世的な言葉 (z.B. 718-745) も見い出されることは否めないが、しかしこれらはむしろ神との結びつきに憧れていることを示すものであり、両親に打ち明ける少女の決意は中途半端な考えから出たものではなく、十分「決心しうる」ほどに成熟した乙女の堅固な考えから出たことを示すものでもあるのである。

こうして娘が死を望み、しかもその巧みな語り方が人間業とは思えないほどであるのを見た (867-70) 両親は、これは精霊が娘をして語らせたのだ (875-6) と考え、神の思し召しによる娘の決心を承諾し (882-6)、夜が明けるのが早いのか、主君の休んでいるところへ娘とともに行って娘の意志を伝えるのである。少女の意志が純真で善良 (reine unde guot, 950) なことをはっきりと認めたハインリヒは、少女の真心 (triuwe, 954) に対して感謝したあと、少女の態度はせっかちな子供 (kint, 961) のようだと言って、少女の決意を変えさせようとするが、この第三の脅しにも少女は屈しないのであり、またその少女の堅い決意は両親の言葉によってもハインリヒの前で証明されるのである。

》 si enhât sich kurze niht bedâht.
ez ist hiute der dritte tac,
daz si uns allez ane lac,
daz wir ir sîn gunden:
nû hât siz an uns funden.
nû lâze iuch got mit ir genesen!
wir wellen ir durch iuch entwesen. 《

「娘は臆病にためらったりはしませんでした。
娘は今日で3日間も
ひっきりなしに
私共の承諾を願ひ、
結局私共も承知をしたわけです。
神様が娘で殿様を治して下さいますように！
殿のために私共も娘をないものに致すつもりです。」

(994-1000)

ここにおける *entwesen* (ないものにする) という語は、両親が娘についての絶対的な支配の権利を放棄することを意味している³¹⁾ と言えるであろう。つまり、娘がなお両親の保護の下にある限り、彼女は自らの権利を持っていないのであり、そのため自由な決心もできない³²⁾ わけであるが、今やここで少女の自由意志による決心が完全に成立したことがこの両親の言葉で証明されたのである。サレルノの医師によって提示されていた *hibære* とその意志の条件が完全に満たされたのである。こうして少女は父母そしてハインリヒという三度にもわたる脅しにも屈せず、神の試しを見事に克服したと言えるのである。

一方、ハインリヒの方はどうか。癪病から逃れ再び輝かしい騎士の世界へ戻ることができるという誘惑的な可能性が差し出されたハインリヒは、成程最初はそれを断わるものの、結局は少女の犠牲を受け取ってしまう。神の誘惑に負けてしまうのである。かつて「窮する人々の避難所」(64)であったハインリヒが、今やいかにして騎士にふさわしくない態度を取っているかということは、W. フェヒターが「イーヴァイン」との比較において証明している。³³⁾ つまり、犠牲を提供したその少女は主君に迷いを取り除かせるために「あなたの命は私の命より大切です」(*iuwer leben ist nützer dan daz mîn*, 938) と言うのであるが、この言葉は「イーヴァイン」の二箇所でも——ルネーテ (4323)³⁴⁾ とシュヴァルツ・ドルン伯の下の娘 (7316)³⁵⁾ によって同じような状況で——語られているのである。しかし、これら女性の言葉に対して騎士が取った態度は、ハインリヒとイーヴァインの場合とは全く異なっていると言わなければならない。騎士イーヴァインは、二度とも騎士の義務に則って、苦境に立たされている女性を助け出すために自らの命を賭けることになるが、一方ハインリヒは自らが助かるために少女に死んでもらおうとしているからである。困窮した人々を救い出すのも騎士の重要な務めであった³⁶⁾ ことを考えれば、このハインリヒの取った態度は真の騎士の姿には程遠いことが明らかである。ハインリヒは今なお新しい意識に到達しているとは言えない。否、それどころか、神に背を向けているとさえ言わなければならない。少女の犠牲を受け入れてサレルノへ向かうことは神の意志に逆らうことなのである。このようなハインリヒが新しい意識に到達するには、サレルノに出かけて少女の超現世的な内的な美しさを直接彼自らの目で見なければならぬのである。

4. 手術台の上の少女——*nacket und gebunden*——

こうしてハインリヒは神の試しに負けて少女を連れてサレルノの医師のところへと旅立つのである。これまで着たこともないような衣裳を身につけて美しい駿馬で (1036-40) 出かける際の少女は、もはや農夫の娘ではなく、神と内的に結びついた少女である。それを見送る両親の嘆きや悶えが全てきれいに拭い去られたのも、神の純愛 (*diu reine gotes güete*, 1051) が彼らの苦痛を和らげてくれたからである。その出発の際の少女の決心が両親の意志とは無関係であった (1055) ということは、やがてハインリヒと少女がサレルノに着いて名医を訪れたとき明らかとなる。名医はつまり手術の際の恥辱や苦痛 (1090-1117) を説明することによって少女

31) H.B. WILLSON: a.a.O., S. 531.

32) Ebd.

33) Vgl. W. FECHTER: a.a.O., S. 7.

34) *iuwer leben ist nützer danne daz mîn*. (Iwein 4323) 引用は》G.F. BENECKE und K. LACHMANN (Hrsg.): Hartmann von Aue, Iwein. Band 1. Text. Walter de Gruyter & Co. Berlin 1968. 《に拠る。

35) *ir leben ist nützer danne daz mîn*. (Iwein 7316) 引用テキストは註34と同じ。

36) ハインリヒ・プレティヒヤ: 中世への旅 騎士と城 (平尾浩三訳) 白水社18頁参照。

の決心を変えさせようとするが、この最後の脅しにも少女は少しも屈することはなく、反対にこう言うのである。

》 ich bin ein wip und hân die kraft. 《 「私は女性でその力もあります。」
(1142)

少女は kint ではなく、分別のある wip であり、犠牲の意志があるばかりではなく、それに耐えるだけの力もあることを示していると言えよう。「私は乙女でそのつもりもある」(ich bin ein maget und hân den muot, 562) という以前の段階より少女はさらに成長していることがこの言葉から明らかである。そして少女は自分の決意が自由意志から発するものであることを明らかにし (1148-51)、その犠牲から得るところが多いことを確信しているのである。

》 —ich weiz wol, durch wen ichz tuo— in des namen ez geschehen sol. der erkennet dienest harte wol und lât sîn ungelônnet niht. ich weiz wol, daz er selbe giht, swer grôzen dienest leiste, des lôn sî ouch der meiste. dâ von sô sol ich disen tôt hân für eine sîeze nôt nâch sus gewissem lône. 《 (1172-81)	「私は誰のためにこうするのかをよく心得ています。 私に命じてこういうことをおさせになる方は、 決して手柄をなおざりにしないで、 ちゃんと報いを与えて下さるのです。 大きい手柄を立てた者は その報いも大きいと、その方がおっしゃったことを 私は知っています。 こういう確かな報いがある以上、 私は今死ぬことを うれしい苦しみだと感じるのです。」
--	---

少女の意志が堅固な考えから出た揺るぎないものであることを認めた (1185-6) 名医は、少女が完全に役立つ (vollen guot, 1191) ことをハインリヒに告げたあと、少女を一人だけ手術室へ連れて入るが、ハインリヒの意識はまだ目覚めないままである。一方、少女の方は円熟しきっている。名医から手術のため直ちに衣服を脱ぐように命じられた (1204-5) 少女は、死を恐れないばかりか、人前で裸体となる恥辱をも苦としないで、否、それどころか、欣然として名医の指示に従い (1206)、急ぐあまりに衣服の縫い目を引き裂いてしまった (1207) ほどである。

schiere stuont sî âne wât und wart nacket unde blôz: sî schamte sich niht hâres grôz. Dô sî der meister ane sach, in sînem herzen er des jach, daz schoener créatiure al der werlte wære tiure. (1208-14)	たちまち少女は一糸もまとわぬ 裸体となったが、 それでも何ら恥じる気色はなかった。 少女を見た名医は 心の中で これほど美しい娘は 世にまたとあるまいと思った。
---	--

これは勿論のこと単なる肉体的な美しさのことではない。裸体はむしろ、名医の言葉(1099-102)からも察せられるように、恥辱を意味するものと言わなければならない。³⁷⁾しかし、衣服を脱いだこの少女の裸体は美しい。少女の内的な善良さが肉体的な美しさとして現われているからである。³⁸⁾ その少女の内的な美しさが憐れみ (erbarmen) の連鎖反応を引き起こすのである。す

37) Vgl. A. SCHIROKAUER: Zur Interpretation des Armen Heinrich. S. 72.

38) Ebd., S. 73.

なわち、その少女の美しさのため憐れ (erbarmen, 1215) に思った名医は、少女を手術台の上に縛りつけたあと、できるものなら死の苦痛を軽減してやりたいものと思って (erbarmen, 1229)、メスを上等の砥石で研ぎ始める。このメスを研ぐ音が、聴覚的に重要な役割を演じて、ハインリヒにも憐憫の情 (erbarmen, 1239) を起こさせ、それがハインリヒの回心の契機となるのである。聴覚的な印象を殊の外強く与えるこの場面のすぐあとに、今度は視覚的な印象を巧みに働かせながら、作者ハルトマンは次のように語っている。

nu begunde er suochen unde spehen,	彼はそこいらを捜しまわったが、
unze daz er durch die want	壁に一つの隙間が
ein loch gânde vant,	あるのを発見し、
und ersach si durch die schrunden	その割れ目を通して彼女が
<i>nacket und gebunden.</i>	裸体で縛りつけられているのを見た。
ir lip der was vil <i>minneclich.</i>	彼女の裸体は大変美しかった。

(1242-7)

「美しい」(minneclich, 1247) という語の意味はここでも官能的・肉体的な美しさのことでないことは勿論のことである。少女の美しさは「裸の」(nacket) 姿にあるのではなく、「裸でかつ縛られた」(nacket und gebunden, 1246) 姿にあるからである。従って、少女が美しいのは、——多くの研究者がすでに指摘してきているように——少女の完全な犠牲的献身の象徴である「裸で縛られた」手術台の上の姿が、見ているハインリヒにとって、裸で縛られた十字架の上のキリストの姿と一緒に一つに融合してしまったからである³⁹⁾ と言えよう。そのような少女の内的な美しさが今やハインリヒの心を決定的に動かすこととなったのである。

<i>nû sach er sî an unde sich</i>	彼は少女を見、また自分を見た。
und gewan einen niuwen muot.	すると次第に気持が変わってきた。
in dâhte dô daz niht guot,	自分が今まで考えていたことは
des er ê gedâht hâte,	よろしくないと思われ、
und verkêrte vil drâte	たちまちのうちに
sîn altez gemüete	これまでの意欲が
in eine niuwe güete. (1248-54)	新しい情け心になったのである。

ここに用いられた *ansehen* (1248) は、単に「よく見ること」(Anblick, Ansicht) ではなく、さらに「洞察」(Einblick, Einsicht) という意味を含んでいる⁴⁰⁾ と言えよう。ハインリヒは少女 (sî) だけを見るのではなく、自分自身 (sich) をも見る (1248) のである。すると彼には新たな気持 (1249) が生まれてきた。少女の美しい姿の中に神への敬虔な心を認めたハインリヒは、今や自分の醜い癩病の身体の中に神への高慢な心を認めたのであり、これまでの彼の意欲は新しい情け心 (1254) へと変わったのである。少女の内的な美しさに触発されたハインリヒは自分自身に向かって次のように言う。

39) Vgl. z.B. A. SCHIROKAUER: Die Legende vom armen Heinrich. S. 266. und auch W. FECHTER: a.a. O., S. 12.

40) Vgl. A. SCHIROKAUER: Zur Interpretation des Armen Heinrich. S. 73.

》 dû hâst ein tumben gedanc,
daz dû sunder sinen danc
gerst ze lebenne einen tac,
wider den niemen niht enmac. 《

(1257-60)

「お前は、その方に逆らっては誰も
何一つなし得ないような方の意志を無視して、
一日の命を生きのびようとするなんて
何という馬鹿なことを考えたものだ。」

「哀れなハインリヒ」の中で唯一度だけ用いられているこのモノローグにおいて、ハインリヒは被造物の有限性を認識し、神に対する高慢(superbia)の態度を放棄するのである。⁴¹⁾ すなわち、今やハインリヒは、神が自分のために定めてくれたことに自ら喜んで従う心構えができたと言えよう。モノローグの中で彼は続けてこう語っている。

》 du enweist ouch rehte, waz dû tuost,
sît dû benamen ersterben muost,
daz dû diz lasterliche leben,
daz dir got hât gegeben,
niht vil willeclîchen treist
unde ouch dar zuo niht enweist,
ob dich des kindes tôt ernert.
swaz dir got hât beschert,
daz lâ dir allez geschehen. 《 (1261-9)

「どうせ一度は死なねばならぬ身なのに、
神から与えられた恥多い生活を
甘んじて忍ぼうとしないとは、
真に己が為すところを知らぬと言わねばならぬ。
それにこの娘の死が
果してお前の命を救うかどうかも
分らないではないか。
神の授けたもうたものは
何なりと受けるがよい。」

そしてこの新たに生じた神への敬虔な心をハインリヒはすぐさま名医にも明らかにする。

》 gotes wille müeze an mir geschehen. 《
(1290)

「私は神の思し召しに従いましょう。」

こうして彼は、美しい (wünneclîch, 1287) 少女の手術を止めて貰うように頼むのである。サレルノの医師もそれを聞いて喜び、ハインリヒの願いにすぐ従った (1295-8) のも当然である。一方、自分がもう死なないことになったのを見てとった少女は、心から悲しんで、行儀作法も忘れて、狂気の如く自分の髪の毛を掻きむしる (1299-305)。しかし、この悲痛な身振りの中には、少女の憐れみと誠実さが真に堅固なものであったことが実証されていると言えるのではあるまいか。少女がそのあとすぐさまハインリヒの臆病な態度を罵るのも、その少女の強い犠牲への意志の現われであり、憐れみと誠実さの堅固さの現われなのである。

》 ich hörte ie diu liute jehen,
ir wæret biderbe unde guot
und hetet vesten mannes muot;
sô helfe mir got, si hânt gelogen.
diu werlt was ie an iu betrogen.
ir wâret alle iuwer tage
und sît ouch noch ein werltzage.
des nim ich wol dâ bi war,

「人々が言うのを聞くと、
殿様は正直で親切で、
しっかりした男らしい勇気のある人だと言います。
ところが、本当はそれは嘘なんです。
それは世の人の見あやまりでした。
殿様はずうっとこれまで臆病者で、
そして今でもそうなのです。
私に我慢できることを

41) W. FECHTER: a.a.O., S. 4.

daz ich doch liden getar,	殿様には我慢できないということ
daz enturret ir niht dulden. (1334-43)	それははっきりしています。
...	...
ob irz durch iuwer triuwe lät,	もし殿様がそれを誠実さから止めるというなら、
daz ist ein vil swacher rät,	それは愚かな決心ですし、
des iu got niht lōnen wil,	神様の報いも得られません。
wan der triuwen ist ze vil. < (1353-6)	なぜなら、それは誠実の行き過ぎですから。」

この少女の辛辣な罵りにおいて、一方ハインリヒもまた神から最後の試しを受けていたと言えよう。しかし、以前と異なって今のハインリヒは、作者ハルトマンも明確に語っているように、どんなに罵られても作法正しい立派な騎士にふさわしく甘んじておとなしくこれを受けた(1361-5)のである。ここで初めてハインリヒは神の恵みが与えられるにふさわしい新しい人物となったと言えるのである。

5. 善良な騎士(der guote herre)ハインリヒ——versuochen——

こうして少女の内的な美しさに目覚めさせられて帰国の途についたハインリヒは、国へ帰ったら、あらゆる人の口から悪口や嘲りを受けることはわかっていたが、彼はひたすらこれを神に委ねることとした(1372-6)のである。彼はすなわち純化されたのである。神はハインリヒの謙讓的な態度の中に高慢の罪に対する心からの懺悔を認めたと見えよう。このハインリヒと、また嘆きのあまり殆ど命も絶えんばかりであった(1377-9)少女の身振りの中に、神は真の誠実さを認め、この二人に恩寵を与えたのである。言い換えれば、純粋な魂の持ち主である少女にとっては神は花婿として、病気の身であるハインリヒにとっては医者として現われた⁴²⁾と言えよう。その箇所を詩人ハルトマンは次のように語っている。

sit er durch sinen stüezen list	聖なるキリストは、
an in beiden des geruochte,	丁度あの富貴のヨブに対してと同じように、
daz er si versuochte	恵み深い慮りによって、
reht alsô volleclichen	騎士と少女の心底を
sam Jôben den richen,	すっかり試されたうえで、
do erzeigte der heilige Krist,	真心と慈悲の徳とが
wie liep im triuwe und bärnde ist,	いかに ^よ 嘉さるべきものであるかを示し、
und schiet si dô beide	この二人の苦しみを
von allem ir leide	きれいに拭い去って、
und machete in dô zestunt	騎士をば直ちに浄らかて
reine unde wol gesunt. (1384-94)	健やかな身体となしたもうたのであった。

高慢の罪の騎士ハインリヒに癩病の形で神が与えたあの重い刑罰(die swæren gotes zuht, 120)は、同時に神の試し(versuochen, 1386)なのであり、かつまた彼の救済の本質的な要素であり道具でもあった⁴³⁾ことがこの作者の言葉の中から明らかである。癩病は救い、すなわち

42) H.B. WILLSON: a.a.O., S. 534.

43) Leslie SEIFFERT: The Maiden's Heart. Legend and fairy-tale in Hartmann's 'Der Arme Heinrich.' *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte* 37, 1963. S. 400.

現世と来世の眞の幸福への大きな契機だった⁴⁴⁾と言えよう。その試練を最後になってようやくハインリヒは見事に克服し、今や神に対する正しい態度を得たのである。しかもそのときハインリヒは元の生活に戻るのではなく、新しい生活を始めるのである。⁴⁵⁾ 癩病の克服は彼に生存の新しいレベルに到達させたのである⁴⁶⁾と言えよう。今やハインリヒは、マリアとの関連で「純粋な乙女」(diu reine maget, 460; 905) と呼ばれていた少女と同じ性質の reine (1398) の身となったのである。⁴⁷⁾ さらに「善良な乙女」(diu guote maget, 342; 1353; 1494) と語られていた少女のようにハインリヒも今や、「哀れ」(der arme)ではなく、「善良なハインリヒ」(der guote Heinrich, 1396) と作者ハルトマンによって語られているのである。⁴⁸⁾ それでもってハインリヒは三つの本質的な特質において自分の模範であった少女に相応する⁴⁹⁾と言えよう。すなわち、ハインリヒは今や少女と同じように「美し」(schœn)く「純粋」(rein)で「善良」(guot)なのである。⁵⁰⁾ 二人を出迎えた人々も「騎士の美しい身体」(an sinem schœnen libe, 1419) を見て神の奇跡を認めた。このように二人はお互い同じ特質を持つ人間となったのであり、ハインリヒは今や以前とは異なって、自分が持っているもの全ては神の恩寵のおかげであるということを知っているのである。

er wart rîcher vil dan ê
des guotes und der êren.
daz begunde er allez kêren
stæteclîchen hin ze gote
und warte sîme gebote
baz danne er ê tæte. (1454-9)

彼は以前にも増して
富と名誉とを勝ち得た。
その富を彼は常に
惜しむことなく神のために捧げ、
従前よりも一層神の思し召しに
従うようにと努めたのである。

これによってハインリヒは世間の奉仕と神の奉仕とを融和させ、名誉と財産という二つの騎士的価値に加えて決定的な三番目のもの、つまり神の恩寵をさらにかち得た⁵¹⁾と言えるのである。こうしてハインリヒはついに「名誉」(êre)と「財産」(guot)と「神」(got)とを統一することに成功し、⁵²⁾ ここで初めて彼の眞の意味での名誉 (êre, 1460) は揺るぎないもの (stæte, 1460) となったのである。

神の恵みによって再び浄らかな身体となった主君ハインリヒは、これまで十分尽くしてくれた小作人家族に恩返しをせずにはいなかったのも尤もである。彼はもはや以前のように悪しき心 (sô valschen muot, 1464) の持ち主ではないからである。小作人家族には十分な名誉と富 (1463) とを授け、また回心の直接の原因となった娘には、財産や安楽な生活やあらゆる物を贈り、さながら彼の奉仕する貴婦人 (als einer frouwen, 1473) もしくはそれ以上のものの如くに扶養したのであった。ハインリヒはここで貴婦人に仕える眞の騎士に成長したことが明らか

44) W. FECHTER: a.a.O., S. 14.

45) Ebd., S. 5.

46) Ebd.

47) Ebd., S. 14.

48) Ebd.

49) Ebd.

50) Ebd.

51) Ebd., S. 5.

52) T. BUCK: a.a.O., S. 313.

である。一方、少女も高貴な騎士ハインリヒが仕える貴婦人(frouwe)なのであり、この frouwe という語の中で宮廷的領域とキリスト教的領域とが接している⁵³⁾と見えよう。身も魂も浄化されたハインリヒはさらにその二つの領域を一つに融合することによって——すなわち、人々が彼に正式の妻(1477)を迎えるようにと勧めたとき、彼は迷うことなくその少女を妻に迎えることを決心することによって——、彼は人々に彼の新しい意識を明らかにしているのである。少女の超現世的な内的な美しさがハインリヒの回心の契機となったのであるから、この二人の間の結婚よりふさわしい結末は考えられないのであり、それは神も人々も認めるところであった。

Nû sprächen si alle geliche

beide arme und riche,

ez wære ein michel fuoge. (1533-5)

すると一同は、

富める者も貧しき者も口をそろえて

それは頗る当を得た縁組であると言った。

かつてお互いを高め合ったこの二人の真の調和的結合を言い表わすために、fuoge (1535) よりもっとふさわしい言葉は使われえなかったであろう。⁵⁴⁾ 成程貴族のハインリヒと自由農民の娘との間の結婚は社会的に釣り合わぬ結婚であることが明らかにされている⁵⁵⁾が、しかし生まれと地位の相違は、二人の「誠実さと憐れみ」の統一の中で克服されたのである。ここにハルトマンの理想主義への努力の結果が現われているのであり、身分上釣り合わぬ二人の結婚の世界は、ハインリヒが到達すべき理想の調和的世界だったのである。

結 び

「哀れなハインリヒ」はこのように神とハインリヒと小作人の娘の三者が織り成す三重の「誠実と憐れみ」(triuwe unde bärmdē, 1390)の物語であると要約できよう。その際あらすじの決定的な転回点では神が必ず直接的に関与していることは注目すべきであり、この作品で作者ハルトマンは神と人間の関係——しかも作者の関心は神と人間の対立ではなく調和である——を取り扱おうとしていることが明らかである。あらすじを展開させるためにまず神が主人公に与えた癩病も、上で述べてきたように、主人公を破滅させるためのものではなく、むしろ反対に名誉あるものへと浄化させる契機としての戒めを含んでいたのである。神罰として余儀なくされた隠遁生活も、騎士社会からの追放よりは浄化への省察の契機という肯定的な意味を持っていたと見えよう。すなわち、この作品を貫いている中心テーマは、ハインリヒの回心であり、作者が目指すものは破滅ではなく、浄化であり美しいものなのである。miselsuht (癩病)という不快な言葉が用いられているのも唯の一行(119)のみで、それが全体において繰り返されていないという事実を考えても、作者が美しいものを求めていた⁵⁶⁾ことが明らかであろう。ハルトマンの目指す世界は実に理想の美しい世界なのである。その美しい理想の縮図は登場人物の性格の中にも表わされている。小作人夫婦の神に対する敬虔な態度は理想であり、天使にも喩えられるその娘の自由意志の誠実さと憐れみは理想なのである。これらは哀れなハインリヒの世界とは正反対の世界なのであり、その理想の世界へ辿り着くことがこの作品でハインリヒに

53) A. SCHIROKAUER: Zur Interpretation des Armen Heinrich. S. 76.

54) H.B. WILLSON: a.a.O., S. 535.

55) L. SEIFFERT: a.a.O., S. 401.

56) Vgl. Helmut de BOOR (Hrsg.): Hartmann von Aue, Der arme Heinrich. Mittelhochdeutscher Text und Übertragung. Nachwort. S. 129. Fischer Taschenbuch Verlag 1980.

課せられた課題であると言えよう。そしてその課題の成就是、身分上釣り合わぬハインリヒと小作人の娘との結婚という形で現われてくるのである。すなわち、この二人の結婚は、ハインリヒの世界と少女の世界、つまり騎士社会とキリスト教社会、現世的なものと同来的なものとの融合であり、ハインリヒが到達すべき理想の調和的世界なのである。この理想の調和的世界を構築することが詩人ハルトマンの本質的イデーであり、この点で「哀れなハインリヒ」はハルトマンの他の作品に通じるものがあると言えるのである。ただ異なる点は、「哀れなハインリヒ」の主人公がその浄化をエーレクのように勇敢な騎士的行為によってではなく、またグレゴリウスのような厳しい懺悔贖罪の苦行によってでもなく、静かな内面的な省察によって成し遂げたということである。まさにこの内面的成長過程が整然と描かれているところにこの作品の特質があると言えるのであり、この作品で内面的にしか省察できなかったものを作者ハルトマンはやがて最後の作「イーヴァイン」においてキリスト教徒としての騎士的行為を通じて見事に実行し成就させるのである。この意味で「哀れなハインリヒ」は騎士の理想的世界を求め続ける作者ハルトマンの内面的な努力の一端を見ることが出来る作品であり、そこにこの作品の意義があると言えよう。このように一見、外面的に趣を異にしている作品ではあっても、その中に表現されている作者のイデーは終始一つであったということを考えるとき、ハルトマン・フォン・アウエは実に騎士の理想像を追い求めて努力することを怠らぬ道德家肌の詩人であったことが容易に理解できよう。「哀れなハインリヒ」は詩人ハルトマンの目指す騎士の理想的・調和的世界に到達するための内面的過程の一つだったのである。(1982・9・27)

※テキストは》 Helmut de BOOR (Hrsg.): Hartmann von Aue, Der arme Heinrich. Mittelhochdeutscher Text und Übertragung. Fischer Taschenbuch Verlag 1980. 《を使用し、テキストから邦語で引用・説明している部分については、相良守峯氏の訳(筑摩書房刊「中世文学集」及び郁文堂刊「ハルトマン作品集」)を参照・引用させて頂きました。